

# パラリンピック開催による障がい者に対する 意識変容に関する一考察

藤田紀昭

(日本福祉大学)

## 1. パラリンピックによる人々の意識変容

新型コロナウイルスの影響でパラリンピックの開催が一年延期となった。パラリンピック開催により、共生社会実現が促進されることが期待されているだけに残念だが、中止とならなかったことは良かった。パラリンピック開催により共生社会を実現することはパラリンピックの重要な目的であり、レガシーでもある。

Gratton & Preuss (2008) によれば、これら多様なレガシーのあり方はポジティブなものかネガティブなものか、計画的なものか偶発的なものか、有形のものか無形のものかの三つの視点に類型化される<sup>1</sup>。人々が障がい者に対してより肯定的な意識を持つようになることはポジティブで無形で、偶発的に起こるレガシーと言える。筆者が2014年から継続的に実施している調査では、この4年間でわずかではあるが人々の障がい者に対する意識にポジティブな変化が見られる(藤田ら2020a)<sup>2</sup>。パラリンピックに関する報道量の増加がその要因の一つとして推察されるが、これをより確実なものとするためにもパラリンピックの開催が望まれるところである。

さて、パラリンピックの開催と人々の障がい者に対する意識のあり方に関しては98年長野パラリンピック終了時点での状況について渡(2007)が言及している<sup>3</sup>。それによれば、64年東京パラリンピックで人々は障がい者の存在を意識するようになったものの、それは大会の祝祭的な雰囲気の中で障がいそのものを直視するものではない、<儀礼的無関心(注1)>と呼べるものであった。長野パラリンピックによってそれは「障害者をとりまく諸環境の問題『障害者／健常者』のカテゴリーの非対称性、身体の差異を隠蔽しながらも、『スポーツ』の文脈であることを強調することで、『共生』や『理解』が成り立っているとす」<sup>4</sup> <儀礼的関心>を生み出すことになったとしている。そこで本稿では渡の所論をベースに、「東京2020パラリンピック」開催によって、これらが障がいやパラスポーツ(注2)に対する「真の関心」へと変化する可能性について考察す

ることを目的とする。

## 2. パラスポーツ，応援の二側面

パラスポーツのレースを会場で応援していると，陸上競技や水泳でトップ選手から相当遅れてゴールしようとする選手に会場から拍手が送られる光景がよく見られる。筆者自身この時，最後まで頑張るスポーツ選手を応援する気持ちと，身体が不自由なのに頑張っている障がい者を応援する気持ちが織り交ざって拍手しているように感じる。同時に，差別する気持ちはないものの，なんとなく上から目線で応援しているような気分になることがある。

このような上から目線の気持ちはどこから来るのであろうか。筆者が2019年12月に実施した障がいのある人に関する意識調査（調査会社に委託したインターネット調査。回答者数は2,066人）では，「障がい者はかわいそう」かどうかを問う質問に対して一番多かったのは「どちらとも言えない」とする人（41.1%）であった。「全くその通り」及び「どちらかと言えばそう思う」と答えた人は29.5%，「全くそうは思わない」及び「どちらかと言えばそうは思わない」と答えた人も29.5%と同数であった。障がい者をかわいそうな人だと思う人とそうではないと思う人の数は拮抗していることがわかる（図1参照）。

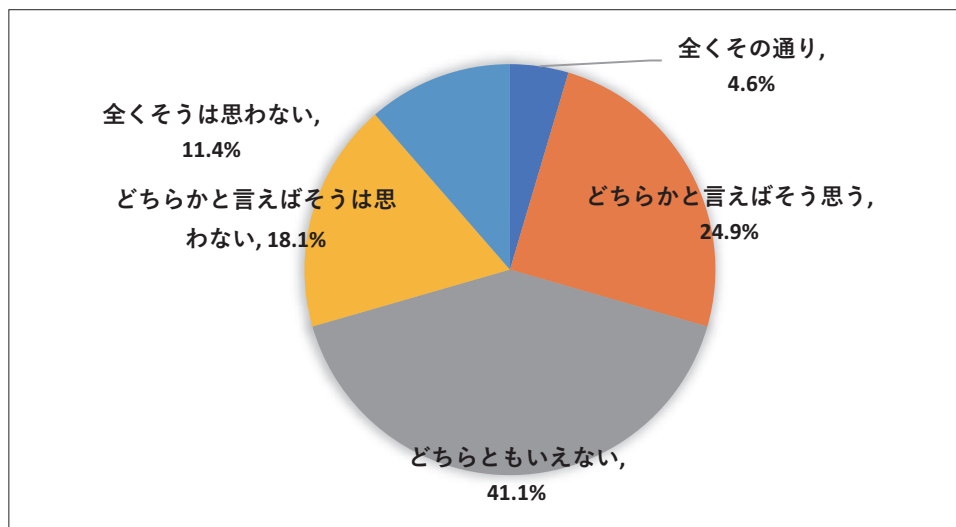


図1 障がい者はかわいそうな人である

近代スポーツは競争を核として発展してきた。平等で正当な競争による結果を重視す

る姿勢は近代社会を象徴するモデルとなり、そのわかりやすさから人々に支持された。「より速く、より高く、より強く」ということに価値が置かれ、そうでないものを競争により峻別してきた。

長年、障がい者はこの点において平等な競争者とはみなされてこなかった。それは障がい者とは身体的に劣った人であり、経済的価値が重視される社会において、生産性をあげることが難しい人であり、庇護の対象であり、かわいそうな人であると考えられていたためである。つまり同じ土俵に上る人とは考えられてはいなかったのである。レースでゴールすることがなかなかできない障がいのある人は気の毒な人で、それにもかかわらず頑張っているから応援しなくてはと思ってしまう。パラスポーツの応援でなんとなく上から目線の気持ちで拍手を送っているように感じるのはこうした理由からだと考えられる。

しかしながら、障がいのある人に対する意識は時代を経るに従って変化してきている。渡（2007）によれば、1964年に開催された東京パラリンピックとその後のパラスポーツの展開は、当初＜作為的無関心（注3）＞状態に置かれていた障がいに対して＜儀礼的無関心（注4）＞を呼び起こしたとしている<sup>5</sup>。施設や病院にいて人々から見えない存在であった障がい者やパラスポーツを現前するものとして認識するようになったということである。この点で1964年の東京パラリンピックの功績は大きい。しかし功績であると同時に、それは、自分たちとは違う障がいのある気の毒な人々が行う特別なスポーツであり、障がいのことや彼らの実生活や日々直面している問題については触れてはいけないもの、あるいは触れようとしない、＜儀礼的無関心＞であったとしている。

近年、人々はパラスポーツに対しては関心を払うようになってきた。図2は過去のパラリンピックを見た人の割合（メディア別）及び見なかった人の割合を示したものである。北京パラリンピックをテレビで見た人は36.4%だったが、リオパラリンピックでは59.4%に増加し、見なかったとする人は51.3%から30.5%へと減少している（注5）。他方、藤田ら（2020b）は「パラリンピック」という言葉を知っている人は「オリンピック」とほぼ同じ96.3%いるが、視覚障がい者の目となる「ガイドランナー」という言葉を知っている人は15.0%、障がいによるクラス分けをする人を指す「クラシファイヤー」という言葉を知っている人は0.6%と認知度が低いことを報告している（図3参照）<sup>6</sup>。同様に、佐藤（2015）はパラリンピックにおいてどの障がいの人がどの競技に参加しているのかを正確に回答した人は0.5%だったことを報告している<sup>7</sup>。人々のパラリンピックに対する関心は高まっているもののその詳しい内容については知らない人が多いことが示唆されている。パラスポーツを理解するためには障がいの特徴やクラス分けや道具、車いすの特性などを理解する必要があるが、その複雑さや競技経験のなさなどから未だ知

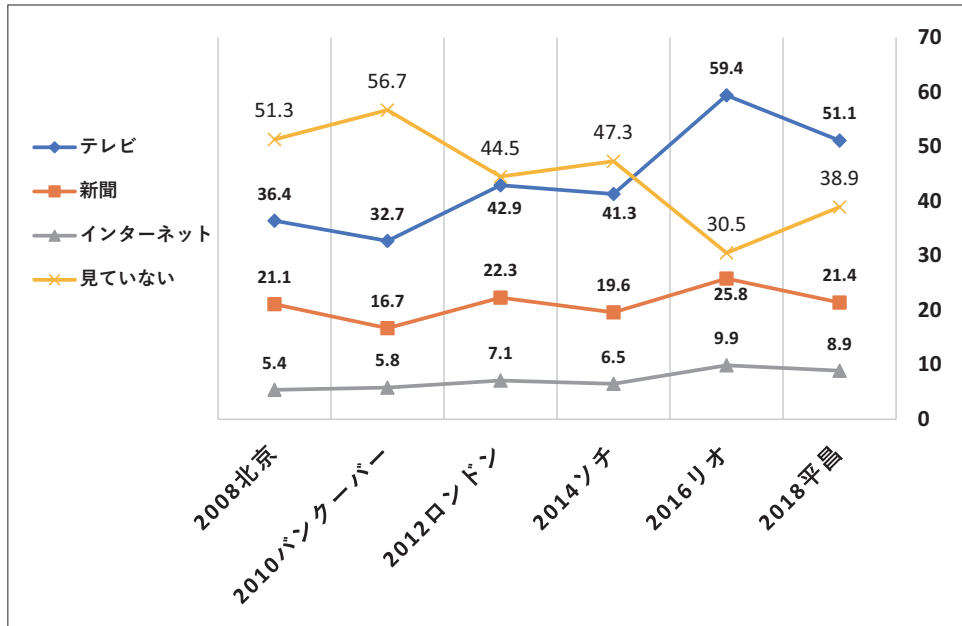


図2 過去のパラリンピックを見た人の割合

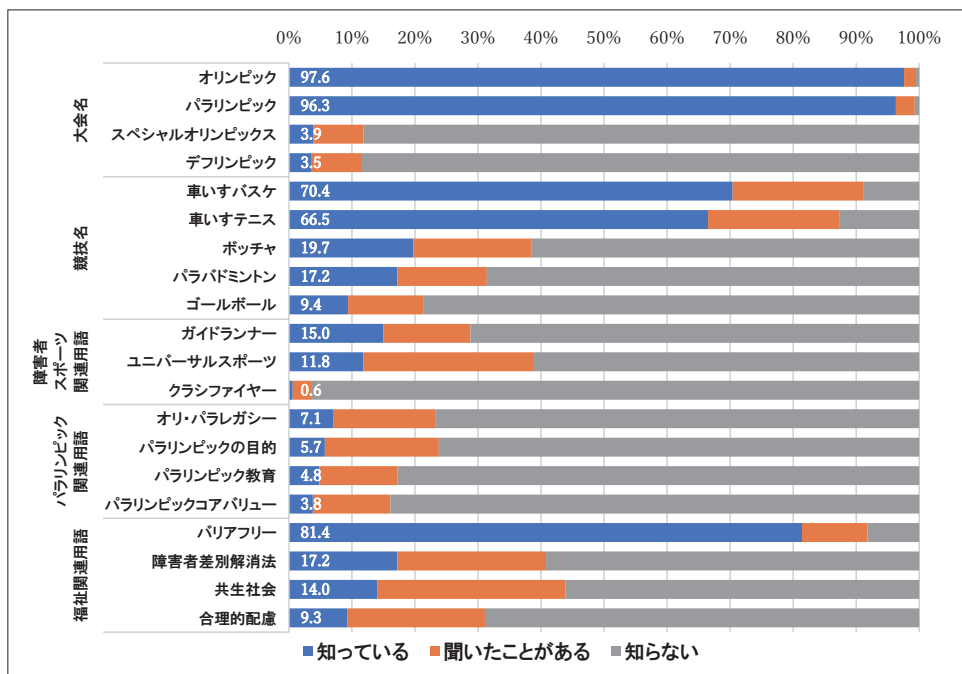


図3 パラスポーツ関連の言葉の認知度 (藤田2020b)

識が十分ではない状態と言える。最近急増しているメディアの取り上げ方を見ても各競技のクラス分けや独特の戦術などに触れているものは少ない。パラリンピックが自国で開催されることでパラスポーツに関心を示すものの競技の詳細を理解するには至っていないと言え、いわばパラスポーツに対して<儀礼的関心>を持った状態と言える。渡(2007)はこの<儀礼的関心>を長野パラリンピックの公式ビデオ『98冬アスリート伝説』をもとに分析している<sup>8</sup>。つまりこのビデオでは、障がいのある身体を映像で映し障がい者と健常者のカテゴリーの存在を暗示しつつ、ナレーションや字幕によって「障害の有無に関係なくみんな同じ、障がいは一つの個性」ということで障がい者に対する<儀礼的関心>が構築されているとしている。

パラスポーツの応援には、障がい者に対する<儀礼的無関心>とパラスポーツをスポーツとして理解しようとするものの、その詳細については理解していない<儀礼的関心>の二側面がある。

### 3. スポーツの楽しさとパラスポーツの面白さ

高橋(2010)によればスポーツは人間が自らの意志で日常とは意味や価値が違う時空間で楽しさを体験することを目的としたもので、人為的に設定された困難に対して自身の能力を進展させ、さらに他者との間で卓越性を競い合い、心身に対する激しさや厳しさといった負荷を伴う活動だという。日常的な時空間とは違う意味や価値(注6)すなわち独自の競技規則やルールに従って、その競技特有の技術や戦術(=心身に対する激しさや厳しさ)を身につけ動くことの楽しさ、そうした動きを洗練させ技術を高めていくことの楽しさ、そして、身につけた技術や戦術をゲームやレースにおいて相手と共に駆使し、競い合って勝利しようとする楽しさ、これらがスポーツの面白さであり、楽しさと言える<sup>9,10</sup>。換言すればスポーツの面白さや楽しさは、①当該競技にしか見られない動きや戦術を身につけ動くこと自体の楽しさ、②当該競技のルールに従って技術を身につけ洗練させることの楽しさ、③当該競技の技術や戦術を駆使し相手と競争し最後まで競い合うことの楽しさであり、この点についてはパラスポーツも全く同じと言ってよい。

藤田(2019)はパラスポーツの面白さ、楽しさについて、近年急激に上がってきた競技レベルの高さ、個々の選手の物語、そして独自のスポーツ技術と戦術の三つをあげている<sup>11</sup>。

障がいの程度(クラス)にもよるがパラスポーツの競技レベルは非常に高い。例えば陸上競技男子走り幅跳びで、片下腿切断のマルクス・レーム選手(ドイツ)は義足を使っ

て8 m48cmを跳ぶ。この記録は障がいのない選手の世界記録には及ばないものの日本記録8 m40cmを上回っている。男子円盤投げ(片下腿切断のクラス)や男子1500m(弱視のクラス)でも同じような現象が生じている。単純な比較はできないものの、リオパラリンピック男子1500m弱視クラスの優勝記録3分48秒29は、リオオリンピックの同種目の優勝記録3分50秒00よりも速かった。パラパワーリフティング(下肢障がいのある人のベンチプレス、ノーギア)のシアマンド・ラーマン選手(イラン、107kg 超級、残念ながら2020年3月に急逝)は健常者の記録を上回る310kgをリオパラリンピックで挙げた。水泳男子100m自由形、手部切断クラスの現在の世界記録は1975年当時の健常者の世界記録とほぼ同じである。車いすバスケットボールの選手が手を使わず、腰の動きで車いすを操作しカットインしてシュートするプレイや、ボッチャにおける私たちが考えもしないような戦術によって得点を得る寸分たがわぬ精度のプレイは見るに値する。

このようにパラスポーツの競技レベルは近年非常に高くなってきており、スペクテイタースポーツとして成り立つレベルにまでなった。事実、夏季パラリンピックではシドニー大会、アテネ大会、北京大会と徐々に観客が増え、ロンドン大会、リオ大会ではチケットが売り切れる競技も見られた。パラリンピックのレベルが上がれば上がるほどパラリンピックはオリンピックに近づき、パラリンピックの価値と面白さはオリンピックと同様に<より速く、より高く、より強く>に沿ったものとなる。しかし、一部例外はあるものの、オリンピックと完全に同じ競技レベルになることはない。どんなに近づいても100mを9秒台で走るパラスポーツ選手は今のところ出てこない。仮に健常者の世界記録を上回る義足選手が出てくれば、おそらく義足はドーピングと同じものと見なされ、結局、健常者と同じ土俵には上がれなくなることが推測される。車いすマラソンは当初、障がいのない人と一緒にレースをしていたが、健常者より格段に速くなることで車いすの部が別に設定されたことや、マルクス・レーム選手がオリンピックに出られないことなどが象徴的な例である。

二つめは選手の物語である。パラスポーツ選手にはそれぞれ多様な障がいがあり、毎日を普通に暮らせるような様々な工夫をし、そしてスポーツに参加する。障がいのないアスリート同様スポーツの場面で努力することに加えて、障がいに対する工夫や努力、後天的障がい者であれば、障がいを負ってからの復活の物語にも私たちは魅せられる。例えば車いすフェンシングのベアトリーチェ・ヴィオ選手(イタリア、下肢のみでなく上肢にも重い障がいがある)は、「今」に満足することはなく飽くなき向上心と挑戦により、自らを高めていく魅力的な選手である。彼女は私たちに勇気と挑戦することの素晴らしさと、人間の魅力に障がいの有無は関係ないことを教えてくれる。

キャンベル(2015)によれば英雄の物語の共通点として「セパレーション(旅立ち)」



→「イニシエーション（通過儀礼）」→「リターン（帰還）」という型がある。映画『スター・ウォーズ』はまさにこれを下敷きにしてつくられたことで有名である。スポーツに置き換えるならスポーツを始め（旅立ち）、多くの壁や挫折、ライバルとの競争、指導者との葛藤、これらを重要な他者（指導者、恋人、友人、家族）の支えを力に乗り越え（通過儀礼）、勝利あるいは人間的成長を遂げる（帰還）というストーリーである<sup>12</sup>。

新聞やテレビで報道されるスポーツ選手の物語や多くのスポーツヒーロー・ヒロインの物語はこの型の上に成立している。そこには近代社会で生まれた近代スポーツのイデオロギーである優勝劣敗、業績主義が色濃く反映すると同時に「それぞれの時代や社会を象徴する価値を体現」<sup>13</sup>している。障がい者スポーツやその選手、ヒーロー・ヒロインは共生社会や多様性に価値を置く現代社会を象徴していると言える。私たちは選手一人一人が乗り越えてきた障がいに伴う挫折、身体の喪失感、スポーツ技術を獲得するまでの過程や差別に打ち勝つ姿に心打たれる。これらは障がいに対する<儀礼的無関心>とパラスポーツに対する<儀礼的関心>を崩し、リアルな障がい者や障がい者スポーツの理解へと進ませる可能性がある。

しかし、一方で障がいを乗り越えることばかりが選手本人の意思に反していたずらに強調されることで、多様でリアルな障がい者像を背後に押しやり、ステレオタイプに障がい者を理解し、いわゆる感動ポルノ（注7）を強要してしまう可能性もある。また、選手の物語の型自体は障がいのないスポーツ選手の物語の型と同様であり、この意味では近代スポーツの価値を強化するに過ぎないとも言える。

最後はパラスポーツ独自のスポーツ技術、戦術である。パラスポーツ選手の場合、同じ障がいでも一人一人の状況は異なる。ゆえに走り方、跳び方、投げ方、泳ぎ方、息継ぎの仕方でも一人一人違う。選手は自分に合った技術を見出し、創り出している。

さらに、パラスポーツ選手の多くは義足や車いす、その他ポッチャのランプや、パワーリフティング選手が体をベンチに留めるストラップ、馬術の選手が使うその選手特有の馬具など様々な道具を利用する。その道具は自分の身体の一部であり、個々の選手がどのようにその道具と一体化していくのか、その過程は障がいのない選手のスポーツには見られない側面と言える。競技レベルの高さと選手の物語には先述のとおり、二律背反的な側面がある。したがってこれら三つの面白さ、楽しさのうち、特にこの点に注目する必要がある。

両腕がなく、口にラケットをくわえてプレイする卓球選手イブラヒム・ハマトトゥ（エジプト）はサーブの時、足の指で球をつかみトスを上げて打つ。電動車いすのテニス選手、ニック・テイラー（アメリカ）は車いすごと回転させてバックハンドストロークを行う。彼もサーブは両足首にボールを挟んでトスを上げる。パラスポーツ選手が発

想の転換と創造力によってスポーツに参加する姿は、人間の可能性の大きさを教えてくれる。車いすバスケットボールでは腹筋の利かない障がいの重い選手から片下肢切断の障がいの軽い選手まで一緒にプレイをする。そのため障がいのない人のバスケットには見られない戦術がある。また、車いすの幅をいかした特有のプレイ、真横に動けない車いすを自在に操作する独特の技術<sup>14</sup>等によって車いすバスケは成り立っている（渡2012）。

パラスポーツ選手の個々の技術について渡部（2005）は「障害のある人たちの身体的技能は、どれをとってみても、『すでにある行為を、決められた方法で獲得した』ものなど一つとしてないはずである。それは、それぞれに異なる身体が持つ『自由』から紡ぎだされた新しく個性的なものである。…中略…つまり障害のある人たちの身体技能は『生』そのものである。障害のある人たちからは、スポーツの技能を獲得する意味が、『すでにある行為を、決められた方法で獲得すること』ではなく、『生』を充実させる広範なイメージを保障する営みであることを気づかされる」<sup>15</sup>ことを指摘している。これこそが他のスポーツにはないパラスポーツ独特の面白さであり、重視されるべき価値と言える。

#### 4. パラスポーツに対する意識の変遷

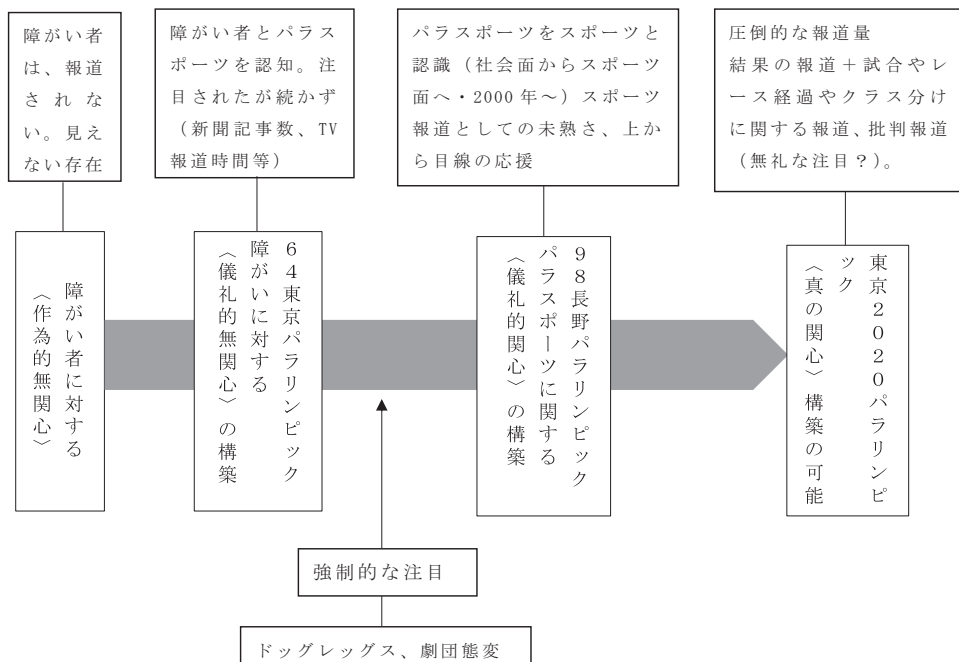


図4 わが国におけるパラリンピックの開催及び報道と障がい者スポーツに対する意識の変遷のモデル



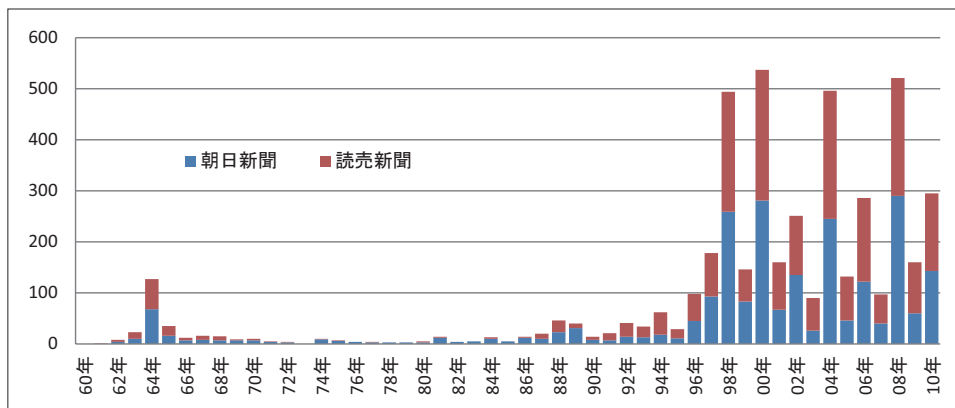


図5 パラスポーツ関連記事数

朝日新聞社聞蔵Ⅱ・読売新聞ヨミダス歴史館より藤田作成

図4はわが国におけるパラリンピックの開催及び報道と障がい者スポーツに対する意識の変遷のモデルを示したものである。

渡 (2007) が指摘するとおり、パラスポーツがほとんど報道されない<作爲的無関心>の状況から、64年東京パラリンピック開催により、障がい者と共に認知されるまでに至った<sup>16</sup>。事実、図5に示すように64東京パラリンピックの年には100を超える記事が見られたものの、それ以前にはパラスポーツを伝える記事はほとんどない。同様に1965年以降で次に記事が増え始めるのは1998年の長野パラリンピックの前である。長野パラリンピック以前では1964年だけ障がい者スポーツに人々の関心が注がれたように見えるがそれでも、この大会を契機に、日本身体障害者スポーツ協会（現日本障がい者スポーツ協会）が創設され、全国身体障害者スポーツ大会（現全国障害者スポーツ大会）が継続的に開かれるようになるなど国の予算を使って障がい者スポーツが振興されるようになったことを考えると64東京パラリンピックの果たした役割は大きい。障がい者の社会参加が謳われ、スポーツがその手段として認識されるようになったのである。

長野パラリンピックを前に報道量が増える。この時、パラリンピック選手団のユニフォームをオリンピック選手団と同じにするかどうかで問題になったことなどからパラリンピックに関する報道に注目する人が増え、パラリンピックという言葉の認知度が高くなったのではないかと考えられる。そして、この後2000年のシドニーパラリンピックの時からパラリンピックに関する全国紙の記事は社会面よりもスポーツ面に掲載される割合が多くなる（図6参照）<sup>17</sup>。長野パラリンピックにおけるユニフォーム問題にみられるようにオリンピックとパラリンピックを同等に扱おうとする意識が生じ、パラスポーツをリハビリテーションや社会参加、障がい者福祉というコンテキストではなくス

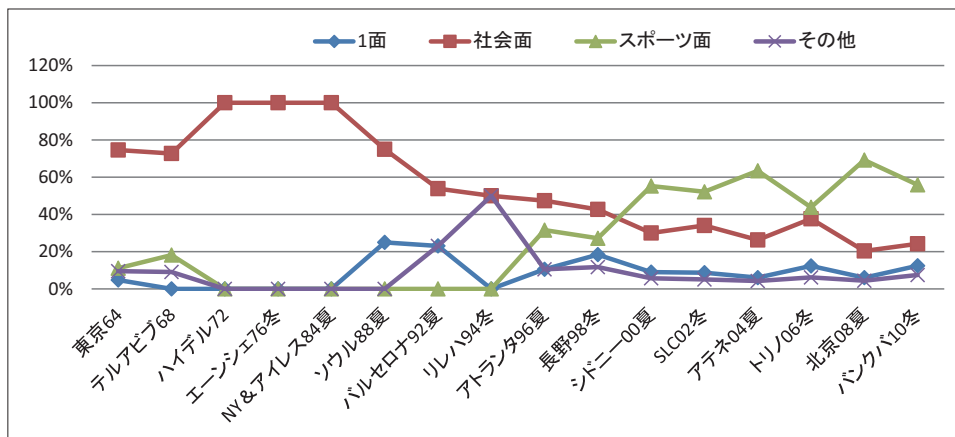


図6 パラリンピック関連記事の掲載面の推移 (藤田2013)

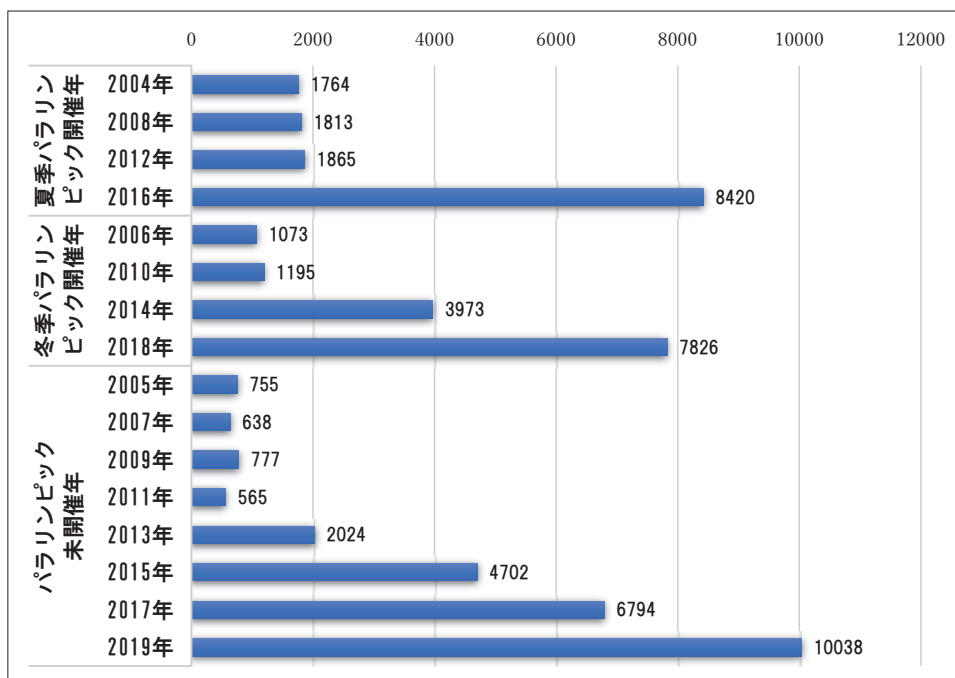


図7 パラスポーツ関連新聞記事数

(読売新聞, 朝日新聞, 毎日新聞データベースより藤田作成)

スポーツのコンテキストに位置付けるようになってきた証左と言える。

パラスポーツの認知度が上がる一方で、多くの人々は障がい者が日常的に直面する課題やパラスポーツの詳しいルールや戦術、障がいの特徴などについては十分理解できていないという、障がいに対する<儀礼的無関心>とパラスポーツに対する<儀礼的関

心>の二側面が見られる状態でもある。そうした中、障がい者プロレスの「ドッグレッグス（注8）」や「劇団態変（注9）」は、障がい者の実態に強制的に目を向けさせようとしたものと位置付けることができる。

延期されることが決まった東京2020パラリンピックではあるが、大会開催を前に関連する新聞報道はこれまでになく増加している（図7参照）。報道量が圧倒的に増す中で記事の内容の変化を期待したい。最近では単に結果の報道に留まることなくレース経過やクラス分けに関することも報道されるようになってきた。これらに加え個々のパラスポーツ選手が身につけたパラスポーツ独自の技術、戦術に関する分析などが多く報道され、理解されるようになることを期待したい。それはパラスポーツそのものを理解することに繋がり、パラスポーツ選手の「生」を見出すことに他ならないからである。これにより障がいへの<儀礼的無関心>や、パラスポーツへの<儀礼的関心>といったある種の覆いを取り除かれ、そこに見えてくる選手の個人的現実と向き合い理解することで、障がい者やパラスポーツに対する意識がさらに変化する可能性を見出せるのではないだろうか。その時、パラリンピックの代表選手は障がい者の代表選手ではなく、私たちの代表と認識されるようになるに違いない。

本稿は「パラスポーツを応援するということ」、2020、『体育の科学』、70(6)、410-414に掲載したものに新たなデータを加えるなど、大幅に加筆修正したものである。

謝辞 本研究はJSPS 科研費 JP18K10907の助成を受けたものである。

#### 注

- (1) <儀礼的無関心 (civil inattention)>とはゴフマン<sup>18</sup>による言葉。エレベーターにたまたま乗り合わせた人が互いに相手の存在を認めながらも関心を向けることなくやり過ごすような行為。
- (2) パラスポーツとは、パラリンピックスポーツに限らず障がい者が実施するスポーツ全般を指す言葉。「パラ」をスポーツ名の接頭語として用い、障がい者の参加する競技を表すこともある。パラバドミントン、パラテコンドーなど。これに対してパラリンピックスポーツは国際パラリンピック委員会が主催するパラリンピック大会に採用されている競技や国際パラリンピック委員会が認定した競技。
- (3) <作為的無関心>はゴフマンの<儀礼的無関心 (civil inattention)>をもとにした市野川<sup>19</sup>による造語。意図的に相手はいないものとして関心を示さないこと。
- (4) 紳士的な注意向け (civil attention), 北田暁大 (2004)<sup>20</sup>。
- (5) 2014年, 2016年, 2018年に筆者が実施した調査結果。サンプル数は2,066。社会調査会社に委託して実施した調査結果。
- (6) 42.195kmを早く移動したければ、バイクや自動車に乗って移動すればよい。しかし、スポーツの時空間ではそうした方法ではなく、あくまで自分で走ってゴールするという違った意味と価値が競技規則によって定められている。
- (7) 感動ポルノ (Inspiration porn) はオーストラリアのコメディアンであり障がい者人権活動家

だったステラ・ヤング (Stella Young) が2012年に初めて使った言葉。障がいがあってもそれに耐え、努力し頑張る姿を強調し、「感動をした、励まされた」と言われるような場面をメディアなどで取り上げることをいう。

- (8) ドッグレッグスはプロレス団体。障がい者と健常者が真剣に闘う。ドッグレッグスを描いた本に北島行徳著『無敵のハンディキャップ』(ちくま文庫)、北島行徳著『弾むリング』(文芸春秋) などがある。
- (9) 劇団態変は1983年に金満里により創設され、身体障がい者にしか演じられない身体表現を追究するパフォーマンスグループ。大阪を拠点に活動している。

#### 参考引用文献

- 1 Gratton, C., and Preuss, H., 2008, "Maximizing Olympic Impacts by Building up Legacies," *The International Journal of History of Sport*, 25(4), 1922-1938.
- 2 藤田紀昭, 安藤佳代子, 兒玉友, 2020a, 「障害者スポーツに関する経験の違いと障害者に対する意識に関する研究」, 『第29回日本障がい者スポーツ学会抄録集』, 24。
- 3 渡正, 2007, 「障害者スポーツによる儀礼的関心の構築: 1970年代の『運動』とパラリンピックの表象」, 『千葉大学日本文化論叢』, 8, 106-93。
- 4 同上, 97。
- 5 同上。
- 6 藤田紀昭, 安藤佳代子, 兒玉友, 2020b, 「障害者スポーツに関する言葉の認知度に関する研究」, 『日本福祉大学スポーツ科学論集』, 3, 11-20。
- 7 佐藤宏美, 2015, 「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心」, 『日本財団パラリンピック研究会紀要』, 1, 45-56。
- 8 渡, 前掲書。
- 9 高橋正紀, 2008, 「スポーツと人間」, 『地域経済』, 27, 63-82。
- 10 高橋正紀, 2010, 「スポーツマンのこころ: スポーツ振興の原点としての心構え」, 『岐阜経済大学論集』, 43(3), 75-28。
- 11 藤田紀昭, 2019, 「東京2020パラリンピックの見どころ&全競技解説」, 『東京五輪を観たい』, 宝島社, 60-63。
- 12 ジョセフ・キャンベル (倉田真木他訳), 2015, 『千の顔を持つ英雄 (新訳版) 上』, 早川書房。
- 13 橋本純一, 2002, 「メディアスポーツヒーローの誕生と変容」, 橋本純一編『現代スポーツメディア論』, 世界思想社, 245-272。
- 14 渡正, 2012, 『障害者スポーツの臨界点: 車いすバスケットボールの日常的実践から』, 新評論。
- 15 渡部憲一, 2005, 『身体障害とジェンダーにスポーツを読む』, 高菅出版, 68。
- 16 渡, 2007, 前掲書。
- 17 藤田紀昭, 2013, 『障害者スポーツの環境と可能性』, 創文企画, 55。
- 18 アーヴィング・ゴフマン (丸木恵佑, 本名信行訳), 1980, 『集まりの構造-新しい日常行動論を求めて』, 誠信書房。
- 19 市野川容孝, 2001, 「『障害者』差別に関する断想-介助者としての経験から」, 坪井秀人編『偏見というまなざし-近代日本の感性』, 青弓社。
- 20 北田暁大, 2004, 『<意味>への抗い: メディエーションの文化政治学』, せりか書房, 189。

# Study on the Impact of the Paralympics on Changes in Awareness about People with Disabilities

FUJITA Motoaki

(Nihon Fukushi University)

With regard to the relationship between the Paralympics and awareness about people with disabilities, Watari (2007) discusses the situation at the end of the Nagano 1998 Paralympic Games. According to the study, the Tokyo 1964 Paralympic Games did lead to the development of awareness about people with disabilities, but that was what could be called “civil inattention,” a product of the festive atmosphere at the time that did not involve actually facing the realities of people with disabilities. Watari notes that the Nagano 1998 Paralympic Games led to the formation of “civil attention,” which is defined as “‘social inclusion’ and ‘understanding’ are thought to be achieved, but with a strong emphasis that it is in the context of sports, and concealing the difficult conditions faced by people with disabilities, asymmetry between the ‘disabled’ and ‘able-bodied’ categories, and physical differences.” Building on Watari’s discussion, this article aims to explore the possibility of the Tokyo 2020 Paralympic Games leading to the development of a “true interest” in disabilities and parasports.

There are three aspects to what makes parasports interesting and enjoyable: the high level of the competitions, stories of individual athletes, and unique sports techniques and strategies.

First, the level of competition in parasports has risen significantly in recent years, enabling some parasports to develop into spectator sports. However, with a few exceptions, they do not reach the exact same level as Olympic sports.

Second, is the stories of individual athletes. According to Joseph Campbell (2015), the stories of heroes share the following pattern: “Separation,” “Initiation,” and “Return.”

Most of the stories of athletes and sports stars covered by newspapers and television are structured based on this pattern. We are deeply moved by stories of how athletes overcame the setbacks and sense of physical loss caused by their disabilities, as well as the process through which they developed their athletic skills and fought discrimination. Such stories may potentially lead to the dismantling of the “civil inattention” to people with disabilities and the “civil attention” to parasports, promoting understanding of the realities of people with disabilities and adaptive sports. However, since such stories stress the process of overcoming disabilities, regardless of athletes’ wishes, they also run the risk of forcing people to participate in so-called “inspiration porn.”

Third, is the sports techniques and strategies unique to parasports. Each para-athlete is in a different situation, even if they have the same disability. For this reason, no two athletes run, jump, throw, swim, or take breaths in the same way. Para-athletes identify and create techniques that suit their own situation, which is a fascinating feature unique to parasports.

Para-athletes each have different physical traits, which in turn produce or enable different techniques. These techniques can be considered to reflect the “real self” of para-athletes (cf. Watanabe 2005), representing one of the fascinating elements unique to parasports that should be valued.

I hope that there will be more extensive media coverage of the Paralympics, along with qualitative changes in news articles. Even if the Paralympics are canceled, I hope that there will be a change in the quality of the content. Media coverage is currently expanding to include class divisions and athletes’ stories, in addition to reporting results. I hope that there will also be updates on races and matches and other relevant information based on an understanding of the unique techniques and strategies developed by individual para-athletes, which would enable people to gain an understanding of parasports and learn about the “real self” of para-athletes. This may lead to the dismantling of the “civil inattention” to disabilities and “civil attention” to parasports, among other concepts that pose a hindrance to understanding, enabling people to come face to face with and understand the realities facing individual athletes, and ultimately bring about further changes in awareness about people with disabilities and parasports.